

— 体幹長に対する比率による形態把握 —

名古屋女大短大 ○坂倉園江 柴村恵子 池田恵子 河野千賀子 新恵美子

目的 被服のための着衣基体の研究は、姿勢を含めた形態研究、モアレ法による総合研究が、各方面で行なわれている。主成分分析による解析では、その取り上げる項目により結果に多少の差位は生じるが、才1、才2の主成分として、幅育関係項目、高径項目が明らかにされ、姿勢を含む形態項目は、才3、才4の主成分として位置づけされるようである。更に形態因子を求めるには、測定データのまより、比率による分析が優れている事も指適されている(人間工学会誌第12巻・中尾氏)。そこで今回は身長の高低に寄与率大の脚長をのぞき、着衣基体そのものである体幹部の形態、特に姿勢の表出する側面の形態に焦点をあて、体幹長に対する各部の比率を用いて形態の把握を試みた。

方法 昭和51年、53年度入学の本学服飾専攻1年次学生206名を被験者とし、5、6月に撮影した写真を資料とした。写真はコンタックスRTS型、ゾナーレンズT85mm F2.8を用い、力大に引き伸ばした正面、側面写真および肩真上から撮影し、約半大に引き伸ばした肩の写真である。解析に用いた項目は、長径、側面シルエット項目、厚径、幅径の32項目(体幹長に対する比)、角度3項目、示数5項目の計40項目を用いて因子分析を行なった。

結果 因子分析の結果才1因子は厚径、横矢示数、ベルベック示数等ボリュームと体幹部の扁平形態を表わす因子であった。才2因子は、腕付根位の高さ(肩傾斜)を表わす因子であり、才3因子は、腕付根位(肩先点)の前後の振りと前後腋窩線の傾斜に関わる因子であった。